

### 第3回日本茶・宇治茶の世界文化遺産登録検討委員会（結果概要）

日 時：平成25年8月26日（月）10:00～12:00

場 所：宇治茶会館 3階 大ホール

#### <結果の概要>

#### 1 委員長まとめ

- ・コンセプトの中心を宇治茶生産の景観におくことは、分かりやすいと思うが、ストーリーの中では喫茶文化や茶道についてきっちり触れて欲しいなどの意見を踏まえ、**再検討した提案コンセプトとして、（仮称）『日本茶のふるさと「宇治茶生産の景観」』として方向性を定める。**
- ・構成資産については、すぐに絞り込むのではなく、文化的景観の背景となる歴史・文化、生活・生業等について、調査研究部会を中心に詳細な調査を行って可能性のあるものを洗い出して欲しい。

#### 2 主な意見

##### ① 宇治茶生産の景観を生み出した技術的背景について

- ・宇治茶は、てん茶・玉露の産地と煎茶の産地とに大きく分けられ、てん茶・玉露は肥沃な土壌でないといいものができないことから、木津川と宇治川の水系の傍にあり、水害などにより肥沃な土壌が運ばれてきたことで適地として育ち、一方、煎茶は、昼夜の気温の較差、季節の気温の較差のあるところで香りのよいものができたことにより、海拔の高いところに産地ができた。玉露の覆い香と煎茶の香りをそれぞれ引き出せる場所に産地が広がっていったのではないか。

##### ② 提案コンセプトの考え方について

- ・宇治茶の技術革新がどのように進んできたのかという実態を示し、お茶が日本の生活文化であること、宇治茶の生産地が都市の消費地の近くにあったことをおさえ、そうした文化が地域に展開している文化的な景観であることを強調するのであれば、ある意味まとまるのではないか。
- ・待庵は禅茶道の喫茶文化の資産であるが、南山城のお茶の生産農家の原風景や問屋街に、急須を使って茶を飲むという日本のお茶の一般庶民の喫茶文化の原点が、南山城の茶の生産景観として残っているのではないか。

##### ③ 構成資産について

- ・宇治茶発祥の地という場合、東宇治地区がないと欠落している。今後の課題の一つに残していただきたい。
- ・「覆下栽培の茶園と集落景観」を「てん茶、玉露の茶園と集落景観」、「露地栽培の茶園と集落景観」を「煎茶の茶園と集落景観」と言い換えることはできるか。また、それぞれの集落景観に違いがないのであれば、それぞれの茶園と集落景観としてもいいのではないか。
- ・宇治茶は、問屋と産地が一体となって作り上げてきた。これは他の地域には見られない茶師と農家が一緒に育んできたので、どちらも欠けてはいけない。
- ・水運でもって茶文化が発展していることは大事なポイントかと思う。上粕地域では、茶の輸出が盛んになり、茶が専業になった。木津川の水運を利用して、生産の7割が輸出されていたと聞いている。

## <検討委員会の発言内容>

### 1 あいさつ

#### ○京都府

- ・お茶は、中国茶や紅茶がり、ヨーロッパでも普及している中で日本茶をどれだけ世界にアピールし普遍性と独自性を表現していくかということは難しい作業であるが、われわれ自身が宇治茶の普遍性と独自性を再認識し、再評価していくことが重要。
- ・検討委員会で、宇治茶の世界レベルでの普遍性、独自性の認識を醸成し、最終的に一つのコンセプトで共通の認識を持ち、日本政府に訴えて政府の中で宇治茶が価値のあるものだと認識させることが重要。世界遺産の立場で宇治茶を冷静に評価し、コンセプトと構成資産を構成していきたいので協力願いたい。

### 2 調査研究部会調査結果報告について（報告）

#### ○委員

- ・調査は、地図に基づき外観調査を行ったものであり、個別の聞き取りをしたものではない。しかし、特に、現在稼働していない茶工場は、共通した形式技法で建てられたと認められたので、もともと茶工場として建てられたものと想定している。宇治市の2地区を除く13地区は実際に現地を歩いて調査した。
- ・茶工場の場合、比較的新しく、トタンなどの鉄板を張った屋根や壁の工場は除外し、伝統的な、概ね木造のものを取り上げた。

#### ○委員

- ・玉露・てん茶の産地と煎茶の産地とに大きく分けられるが、何故このように位置するのかを理解していただきたい。
- ・玉露とてん茶は肥沃な土壌でないといけないのができない。木津川と宇治川の水系の傍にあり、水害などにより肥沃な土壌が運ばれてきたことが適地として育ってきた。
- ・煎茶は、家康伊賀越えの道沿いで香りのいいお茶ができたとき、調べ切れていないが大福谷というところに永谷宗円が作っていた茶園があったようだ。そこから奥山田に抜ける茶屋村がありその沿線が香りのよい煎茶ができる茶園がある。さらに、朝宮に移り湯船に移り原山に移っていった。玉露の香りは覆い香と言って覆いによって生まれ、海拔が高くなくてもよいが、煎茶は、昼夜の気温の較差、季節の気温の較差のあるところで香りのよいものができたことにより、海拔の高いところに産地ができた。玉露の覆い香と煎茶の香りをそれぞれ引き出せる場所に産地が広がっていったのではないか。

#### ○委員

- ・玉露とてん茶は河川を利用して下肥を肥料として活用したこともあり、都市部に近いところに茶畑が多い。覆い香は、直射日光を避け十二分な肥料を与えると、茶の木は大きくならずに肥料を吸い上げ、遮光率は95～98%となり、雨が降ると覆いをしているわらの臭いが葉に入ることによりできると考えている。
- ・煎茶は、肥料をたくさん与えると香りが落ち、肥料をあまり与えないほうが、すがすがしい香りがするため、いわゆる山茶と言われ、海拔の高いところでつくられるようになった。一方で、てん茶・玉露は、覆いをすることで、昼夜の温度差をなくし肥料を多く

与えながら茶の木の成長を抑えることで覆い香という独特の熟成した香ができる。このことから、それぞれに適した産地が広がっていった。

#### ○委員

- ・宇治は中宇治を中心とした茶の集散地であったことが特徴である。ブレンド技術は、香りのいいものと味のいいものや生産時期の異なるものをブレンドし、お茶屋のオリジナルの味と香りを創り出し、年間通じて変わらない商品を消費者に提供することが宇治の間屋業であり、そのためには、一定の茶園から生産したものだけで作り出していないところも、宇治茶の特徴である。

### 3 議事：提案コンセプトの再検討について

#### ○委員

- ・宇治橋の下流右岸にてん茶ばかりを生産している「岡本」という地区がある。河川敷であり、五ヶ庄一体の茶畑を文化遺産に考慮して入れてほしい。五ヶ庄は宇治茶の発祥の地であり、川沿いに10軒近くが生産しており、京都に近く発祥に近いところである。ただ、白川地区に比べると茶工場も含めて近代的な町並みに変わっている。

#### ○委員

- ・南山城の茶生産農家のところを5、6年前に訪問したが、それぞれの家の接待の多くが現在の煎茶の点前を簡略したものであった。待庵は禅茶道の喫茶文化の資産であるが、南山城のお茶の生産農家の原風景や問屋街に、急須を使って茶を飲むという、日本のお茶の一般庶民の喫茶文化の原点が、南山城の茶の生産景観として残っているのではないか。

#### ○委員

- ・相対的には東宇治地区とした方がいいが、歴史的文献で宇治茶発祥の地といった場合、東宇治地区がないと欠落している。駒蹄影園の碑がいつ建ったのかという、疑問は残されているが文献的には五ヶ庄は外せないと思う。今後の課題の一つに残していただきたい。

#### ○委員

- ・文化的な面が全面撤退となっているが、喫茶文化まで引っ張るのはどうかという有識者のアドバイスや調査結果、先ほどの委員のご意見を伺うと、宇治茶の技術革新が進んできたのかという実態がよく分かったので、これでまとまればよいとの思いをしている。先ほど宇治茶が日本の生活文化を含んでいるという記述が必要という意見がありましたが、そのことと生産地が消費地の近くにあったことをおさえ、そうした文化が地域に展開している文化的な景観であることを強調するのであれば、ある意味まとまってきたと思う。

#### ○行政委員

- ・宇治茶は、問屋と産地が一体となって作り上げてきた。これは他の地域には見られない茶師と農家が一緒に育んできたので、どちらも欠けてはいけない。
- ・先ほど、味と香りの話があったが、黄金色がさわやかさとして賞賛を受けてきたことも

特色ではないか。

- ・木造の茶工場に文化的価値があるとされているが、生業としては各農家で茶工場を持っては、採算が取れないため共同工場化が進んでおり、茶工場の数が減っている。こうした中で個々の茶工場をどう守っていくのかは課題である。
- ・和束では土地の関係で覆下になじまない。消費者の趣向が変わる中、てん茶を作る向きがあり、じか掛けするため樹力が保たないのではと心配するが、高く売れるから経営維持のためにされているので行政としては見守るしかない。世界文化遺産を進めることで、歴史文化を支えてきた誇りが生まれる。農家の誇り、地域の誇りが生まれる。儲けだけではない誇りが出てくれば、産地を守ることができると思うので、自信を持ってまちづくりを進められる。農家にとっても住民にとってもありがたいことである。
- ・お茶の歴史は町村で認識が異なる。和束町には、明恵上人から海住山寺の慈心上人が種を譲り受けて、鷲峰山山麓に撒いたと伝わっているので、歴史認識を統一する必要がある。
- ・産地が潰れて商標である宇治茶だけが残るようなことがないようお願いする。

#### ○行政委員

- ・当時、南山城村からどうやってお茶を運んできたのか、島ヶ原から船で大阪まで定期便が出ていて、それで庶民も大阪に買い物に行き、お茶を運んでいた。木津川の水運でもって茶文化が発展していることは大事なポイントかと思う。
- ・木津川市上粕に大きな茶問屋があり、上粕から業者が来て買い集めて、船で運んだと聞いている。

#### ○行政委員

- ・茶工場である古い建物をどうして保存していくのが課題。共同化が進んでいるので数が少なくなっている。
- ・手揉み保存会も大変な文化であり、茶問屋の若い方がやっているのでもっと残していくことが大事。
- ・おもてなしの心を文化にしてほしい。特に煎茶は、訪問されたお客様に間をもってお茶を淹れ、会話をしながらお茶を楽しんでいただく。こういうことも一つの文化である。

#### ○行政委員

- ・上粕地域については茶問屋街として、重要な古い建物が壊されているという状況もあり、環の拠点創出事業を立ち上げ、歴史的な建物を活かしながら街並みづくりを進め、それらを保全活用する取組を進めている。
- ・上粕地域では、はじめは綿の取り扱いが多く、明治から綿と茶の兼業となり、さらに茶の輸出が盛んになり、茶が専業になった。木津川の水運を利用して、生産の7割が輸出されていたと聞いている。明治17年に山城茶業組合が3200人、現在30数軒、なんとかこの町並みを残したい。

#### ○行政委員

- ・以前は茶生産も行っていましたが、玉露、てん茶、煎茶、馴染みがあるのは番茶。茶は食するもの、食べるものとするれば、味がよい、見た目がよい、いい香りがする、食文化というのは、一般の方がすぐに受け入れて欲しいものであり、世界遺産になるためには、茶に親しくない人にも分かりやすく説明をつけることが重要。

○行政委員

- ・重要文化的景観の選定をはじめ茶に特化した取組を進めてきているが、町並みの景観保存は課題。コンセプトが日本茶のふるさと宇治茶生産の景観とされ、景観に焦点が当てられた。宇治の場合、本ず茶園の景観として高く評価をいただきありがたい。これから行政には景観を守っていく大きな責務が課せられる。いずれにしてもこうした会議で宇治の価値が伝わっていければと思う。

○行政委員

- ・構成資産の一番に来るのは、「茶師・茶商の屋敷群」ではないか。

○委員長

- ・景観ということであれば、一番説得力のある景観が一番に来るべきと考えるが、特徴のあるものを一番にとという考え方もある。

○委員

- ・「覆下栽培の茶園と集落景観」を「てん茶、玉露の茶園と集落景観」、「露地栽培の茶園と集落景観」を「煎茶の茶園と集落景観」と言い換えることはできるか。
- ・また、それぞれの集落景観に違いがあるのか、ないのであれば、それぞれの茶園と集落景観としてもいいのでは。

○委員

- ・覆下と露地で、集落景観に大きな違いはないが、歴史的な経過で覆下というのは宇治地域でしかないというのが特徴。

○委員長

- ・覆下と露地で相当、歴史的経過に大きな違いはあるが、景観には大きな違いはないということ。

○行政委員

- ・覆下栽培と露地栽培はそれぞれ適地があって、そこで発展していった立地条件に違いがある。覆下栽培の景観に含めなければいけないのは、覆いの材料を保管する納屋が存在。宇治茶はこの2面性をもって発展してきたのが特徴であり差異がある。

○委員

- ・骨子（案）の記述の中で、「～支え育みながら、将軍や大名、江戸商人」とあるが、京都が出てこない。これであれば江戸を支えたこととなる。公家とか庶民が需用者の大きな要素になるので、そこがないと京都文化にならないので、記述していただきたい。

○委員長

- ・それでは、（仮）ということになるが、『日本茶のふるさと「宇治茶生産の景観」』ということで、方向性を定めていくことでいかがか。→了承
- ・それに伴っていろんな検討が必要になるが、調査研究部会も含めて願います。